

開会の挨拶

司会者 黒柳 米司

ただ今から、政治学科創設一〇周年記念シンポジウムを開会させていただきます。

開会に先立って、ひとことご挨拶を申し上げたいと思います。

お手元に「大東文化大学法学部政治学科一〇年間の歩み」という紙を配布いたしました。ここにも示されている通り、今年は、政治学科が開設されてから、一〇周年目にあたっております。これを記念して、本学科の教員諸氏と学生諸君の双方にとつて、意味のある行事をやりたいというふうに考えておりましたところ、このようなシンポジウムという形で執り行う運びとなりました。開会に先立ちまして、基調講演にご参加下さいました先生方を紹介させていただきます。私の隣にいらつしゃいますのは、神戸大学の初瀬龍平先生であります。そして、法政大学の松下圭一先生であります。そして、本学の安世舟先生であります。それから、パネリストということで参加していただきます、政治学科土岐寛教授、加藤普章教授であります。いちばん右端にいらつしゃいますのは、今年の四月に本学政治学科を卒業なさいまして、現在は、自由民主党の衆議院議員である小林興起代議士の秘書をしておられる荒木男さんです。

さて、本日のシンポジウムのテーマは「現代政治学の諸課題 分権化と国際化のはざままで」というふうになっております。このテーマでは、もしかするとやや紋切り型に聞こえるかも知かりませんが、実は、これは今を遡ること一〇年前に安先生を中心といたしまして、この政治学科が設立されたときに、その「設立の理念」と言いますか、地方政治・行政コースと国際政治・情報コースという二つのコースを持った政治学科を作るときの理念として、「地域からの国際化」という言葉が採用され、これを受けてこのようなテーマとなっていることでもあります。この「地域からの国際化」

という理念等については、設立に当られた安先生からお話をいただくのが妥当だと思いますので、私は、このことについてはこちらでは触れません。

学生諸君は、試験等が近づくと時としてそういうことをなされるかもしれませんが、私自身も、実はやや一夜漬け気味に「分権化時代」とはどのようなことなのだろうかということについて、考えてみましたし、地方分権一括法案というのがこの七月に法律になる、という問題だとか、国際化に関して言えば、脱・冷戦以後の地域紛争とか、民族紛争、資源、エネルギー、食料、環境、人権、民主化というふうによくのテーマがあるのだということについて、ざっと復習をしてみました。このことをここで長々とお話していますと、時間を浪費するだけになってしまうので、今回のシンポジウムのテーマになぞらえて今からおよそ三〇年前に、私自身が政治学を学んでいた時の記憶の中から、ほんの一つだけをお話しをして、ご挨拶に代えようと思います。

私自身は、ASEANを中心とした東南アジア地域の政治を専門にしていますけれども、三〇数年前、大阪市立大学の法学部におりました時には、「政治学原論」のゼミに所属していました。当時、あまり真面目な学生でなかったと見えて、「政治学とは何だろうか」ということについてほとんど頭の中に残っていない。たった一つだけ残っているのは、あの種の言葉でありまして、四書五経という中国の古典の中に「大学」というのがありまして、その中に「修身齊家治國平天下」という言葉があります。これは、文字に書かないとわかりづらいと思いますが、「修身」は身を修めるという字、「齊家」は、一斉に立ちあがるの斉という字に家、治國は、治安の治に國、それと平らかな天下と書きまします。この「修身齊家治國平天下」という言葉の意味は、政治の最終目標は、「治國」つまり國を治め、「平天下」ということで天下を平らにする、ということところにあるけれども、これを実現するためには、まず家を整え、そして身を修めなければいけない、ということなのです。もちろん、これは、中国の古代、唐、宋の時代の言葉でありますから、ここで

現れてくる国、あるいは天下といったものが、二一世紀を目前に控えた現代の国家や国際社会というものと同じものを意味しているとは、到底思えない。ただ、私が注目したいのは、一人ひとりの個人の生き方、つまり認識であるとか行動様式であるとか、そういうものが、家庭、地域、国とだんだん広がっていつて、国際社会の平和と安定というものに、分ちがちがたく結びついていないか、という問題点。この連環というか、個人から国際社会への広がりをもった関連というのは、おそらく時代を超えて、妥当するものではないかというふうを考えるわけです。つまり、我々は、小は地域社会の問題から、大は国際社会全体の問題まで、学び、かつ行動するということが必要であろう、というふうはこの言葉が示しているように思うわけです。

私のこの回想は、もしかすれば本日お話をいただく先生方の基調講演というものと、かけ離れたものになるかもしれませんが。ある種の雑感に近いものであります。しかし、こういう私なりの問題意識を持って、本日のシンポジウムからできるだけ多くのことを学びとりたいと、私自身、身構えておりますし、ここに来られた学生諸君にもそのような姿勢で取り組んで欲しいと考える次第です。

主催の国際比較政治研究所の所長として、ひとことご挨拶を申し上げます。

次に、このシンポジウムの進め方なのですが、前にある式次第の進行とは若干異なりまして、松下先生がご都合により、このシンポジウムの最後まで残られないということで、大きく二部構成とさせていただきます。最初に、松下先生に「分権化時代の政治学」ということで、基調講演をいただき、その後これを受けて土岐教授からコメントと質問をお願いいたします。これを受けて、会場からの質疑応答をしていただくということになります。

これが、第一部となり、その後休憩、コーヒープレイクを挟みまして、第二部ということになります。初瀬先生、安先生の順で基調講演をしていただき、これに対して、加藤先生、荒木さんの順でコメントあるいは質問をいただき、そ

れから質疑応答ということを進めたいと思います。全行程、四時間という長丁場ではありませんが、話題そのものは非常に興味深いものでありますし、それぞれの分野で第一人者の先生方をお招きしましたので、学生諸君には失礼のないように、真剣に聞き取って、必要とあれば質疑応答に積極的に参加するように姿勢を持って臨んでいただきたいと思います。

それでは、「分権化時代の政治学」について法政大学の松下先生の方から、基調講演をお願いいたします。先生の業績について、私はそれこそ三〇年前に学んだのですが、言葉としてよく覚えているのは「シビル・ミニマム」という「市民社会の基礎要件」とでも言いますか、そのような概念について学んだ記憶がありますが、おそらくこの講演の中でもそういったものを反映しつつ、先生からのお話がいただけるものと思います。

それでは、松下先生、よろしくお願いいたします。